

第 25 回日本医療マネジメント学会学術総会
ポスター発表

保険薬局における発熱性好中球減少症に適切な対応を行った 1 例

総合メディカル株式会社 そうごう薬局 天神中央店
本村 真悟

【目的】令和 3 年 8 月制度開始となった「専門医療機関連携薬局」は、がん等の患者に対し他の医療提供施設と連携しつつ、より高度な薬学管理が行える薬局であり、そうごう薬局天神中央店（以下、当薬局）も認定を受けた。当薬局では、質の高いがん患者対応を標準的に行うための①「がん患者対応クリニカルパス」、電話フォロー時の対応方法、主な副作用発見時の対応についてまとめた②「服用期間中のフォローアップ標準手順」を作成・運用しがん患者のフォローアップを行っている。今回は、特に②を活用し、重篤な副作用である発熱性好中球減少症（以下 FN）への適切な介入を行い、治療強度を落とすことなく乳がん術後薬物療法を支援した事例について報告する。

【方法】「服用期間中のフォローアップ標準手順」の概要としては①手順全体の概要、②具体的文言を用いた対応フローチャート、③副作用発見時の重症度評価やエビデンスに基づく詳細の対応フローチャート（抗がん薬による主な副作用 16 種類）となっている。

【症例】40 代女性。HR (+) HER2 (-) Stage IIIA 乳がん術後薬物療法として EC 4 コース +DTX 4 コース予定の患者。パスを活用し毎回電話フォローアップを実施。EC 1 コースに FN 発症。以降 4 コースまで G-CSF 製剤が予防投与され、FN 発症なし。DTX 2 コース day8 患者からの電話相談にて発熱を聴取し FN と判断。パス・応需先病院取り決めに則り EC 時に予備処方されていた抗生剤の服用を指示した。その後の電話フォローアップにて 3 日後に解熱を確認。更に次コースより G-CSF 製剤の 2 次予防投与推奨に該当すると判断。この提案と経緯を書面で主治医に情報提供した。結果次コースより提案採択され G-CSF 製剤を予防投与。その後 FN 再発なく 4 コースを完遂した。

【考察】上記フォローアップ手順に則り、適切な対応をすることで、FN という重篤な副作用に対し、その場での対処から次回以降の予防に至るまで適切な提案・対応を行う事ができたと考察する。